

近現代史特講③

○中華民国の成立

- ・孫文…1894年ハワイで興中会→1905年東京で中国同盟会
→三民主義 ①民族の独立(清からの独立→共和国をつくる)
②民権の伸張(民主主義)
③民生の安定(生活の安定)
- ・利権回収運動←土地や鉱山、鉄道の利権を取り戻す(民族資本家による)
←幹線鉄道国有令に反対して起こす

⇒1911年9月、武昌蜂起←新式軍による



→中国南部に拡大→1912年1月、南京で中華民国成立(臨時大總統:孫文)

清朝の内閣総理大臣の袁世凱は孫文と取引→清を裏切る

⇒袁世凱が臨時大總統となる(→宣統帝(溥儀)が退位し、清が滅亡(1912))

→臨時約法を公布するも独裁化⇒孫文らは国民党を結成するも、弾圧

→東京へ亡命し、中華革命党を結成

○袁世凱と日本

- ・1915年、二十一箇条の要求(←日本はドイツの租借地、青島を攻撃)
→袁世凱はこれを受け入れる
- ⇒国民の人気を失うも、帝政運動→部下の反対にあい、失敗→失意のうちに病死(1916)
⇒軍閥による後継者争い
 - ・奉天派—張作霖
 - ・直隸派
 - ・安徽派—段祺瑞
 - ・広東軍政府←孫文が提携

日本が支援(石井・ランシング協定(1917)で、アメリカは日本の中国の権益を認める)

○反帝国主義運動の高揚

- ・文学革命←陳独秀が『青年雑誌』発表(1915)
↓
→1921年、中国共産党の初代委員長に
胡適:『白話運動』(口語体文学の運動)
↓
→実践者は魯迅(『阿Q正伝』など)
- マルクス主義の思想家、李大釗(←北京大学教授)

→1919年5/4 五・四運動の展開

⇒孫文が中国国民党結成



ソ連が接近し、カラ＝ハン宣言(帝政ロシア時代の中国の既得権益を放棄)

→コミンテルンにより、中国共産党を指導

⇒1924年第一次国共合作(国民党一全大会において)←広州で

↓ →「連ソ・容共・扶助工農」をスローガン

1925年、孫文の死去(「革命いまだ成らず」)

→五・三〇事件…上海の中国人労働者がストライキ←イギリス人警官が発砲

↓ →一大反帝国主義運動へ

広州国民政府の成立(主席:汪兆銘 総司令官:蒋介石)

→北伐の開始(1926)

→別働隊が“武漢政府”樹立(1927)←汪兆銘中心(共産党員も中心に)



蒋介石が上海クーデタ(1927)→多数の共産党員を虐殺＝第一次国共合作の崩壊

→1928年、北伐の再開←日本の干渉(1927年、山東出兵)



→済南事件で日本が勝利するも国際的非難により撤兵

北京を占拠→張作霖は根拠地の奉天へ逃亡

→張作霖爆殺事件(1928)(←日本の関東軍による)

→息子の張学良が日本を恨み、蒋介石降る

⇒汪兆銘も反共に転じ、蒋介石は1928年に中国統一を達成

○共産党の活動

弾圧を受け、農村へ→1927年、広東省に解放区(陸豊、海豊)

↓ →土地改革による農民の支持

⇒1931年、江西省の瑞金を都とし、中華ソヴィエト共和国臨時政府を樹立

1930年、長沙攻撃により、国共内戦に←蒋介石は兵糧攻め

→共産党は耐えかねて、長征開始(1934)→陝西省の延安を目指す

⇒“北上抗日”を提案した毛沢東が、遵義会議で指導的地位

⇒八・一宣言(1935)…“内戦の停止”と“一致抗日”(抗日民族統一戦線)

○日本の動向

・1931年9/18、南満州鉄道を爆破(柳条湖事件)

←国民党軍の仕業として関東軍が満州を占領＝満州事変

→1932年、上海事変(日本人殺害事件をきっかけに、市街戦→欧米各国が調停)

⇒このすきに、満州国を建国(執政は溥儀)

⇔国連のリットン調査団によるレポート→日本は国際連盟を脱退(1933)

・日本は1933年、熱河地方を攻撃→河北に防共自治政府をつくる

○蒋介石の動きとその影響

蒋介石は、共産党を一番の敵としていた(←日本とは積極的に対抗しなかった)

→張学良を西安へ派遣し、延安を攻撃しようとする

⇔西安事件(1936)…張学良が蒋介石を監禁し、共産党の周恩来が蔣を説得

⇒第二次国共合作(抗日民族統一戦線)(1937年9月)

→紅軍を八路軍・新四軍に編制

○日中戦争

1937年7月 盧溝橋事件をきっかけに全面戦争に＝日中戦争の開始

↓ →第二次上海事変→長江をさかのぼり、12月に南京を占領→南京事件

↓ ⇔蒋介石は首都を武漢→重慶へ上流へ移動(→長期戦へ)

日本は南京に傀儡政権(1940)＝汪兆銘を首班とする南京国民政府



日中戦争は泥沼化←イギリスなどが東南アジア経由で中国を支援(援蔣ルート)



⇔日本は仏印進駐

中国との連携強化のため、不平等条約の撤廃を提唱(1943)←租界・租借地の返還を約束



1945年、終結

→蒋介石の国民党vs毛沢東の人民解放軍＝国共内戦(1946)

⇒1949年10/1 中華人民共和国の成立(国家主席:毛沢東 首相:周恩来)

○20世紀インドの情勢

イギリスの植民地→インド国民会議を設立(1885)

→ベンガル分割令(1905):ヒンドゥー教徒とムスリムの居住地域を設定し分割

⇔国民会議派はカルカッタ大会(1906)←中心はティラク



→四綱領の制定

イギリスが対抗するため、ムスリムに全インド＝ムスリム連盟結成の援助

⇒第一次大戦中、インドはマドラスで大会→イギリスへの協力(←英も戦後、自治を約束)

→戦後、ローラット法の制定



⇔パンジャブ地方でデモ→アムリットサル事件(1919)

インド統治法(1919):インドに一定の自治(実際はインド総督の独裁)

⇒イギリスの支配に対抗したのが、ガンディー

→徹底した、非暴力・不服従運動(サティヤーグラハ)

→ムスリムとの共存を目指す(→ジンナーらと協力=ラクナウ協定)

⇒1927年、運動が再燃→ラホール大会(1929):プールナスワラージの方針←ネルー活躍

→塩の専売に反対したガンディー→塩の行進(1930)



英印円卓会議(1930)→しかし、インド人の望む自治・独立を与えず

→新インド統治法(1935)→インド総督や知事は、イギリスが任免(何も変わらず)

→ビルマのインドからの分離

⇒第二次大戦中は、イギリスに対する運動を展開→ガンディーは逮捕

↓→チャンドラ・ボースはインド国民軍を組織→日本と連携

大戦後、ボンベイでインド海軍の反乱(1946)→各地でデモ

⇒インド独立法(1947)(←労働党アトリー内閣のとき)

- ↓ { ①イギリス連邦内の自治領としての独立(←ネルー)
②パキスタンが分離独立(←ジンナー)

←ガンディーは分離には反対→説得を試みようとした矢先、暗殺

1950年、インド共和国として完全独立